

地域の国際的な観光まちづくりの担い手として、通訳案内士の活用方策について

旅行形態がFIT化しているなかで、訪日外国人に対するきめ細かな観光情報の提供が不足している。

観光案内所は、外国人向けツアー情報、宿泊・交通、イベント、医療その他各種サービス等各種問い合わせ、相談が寄せられる。こうした情報を外国語で的確に得られてこそ、訪日客の旅の快適性と安心が高まる。

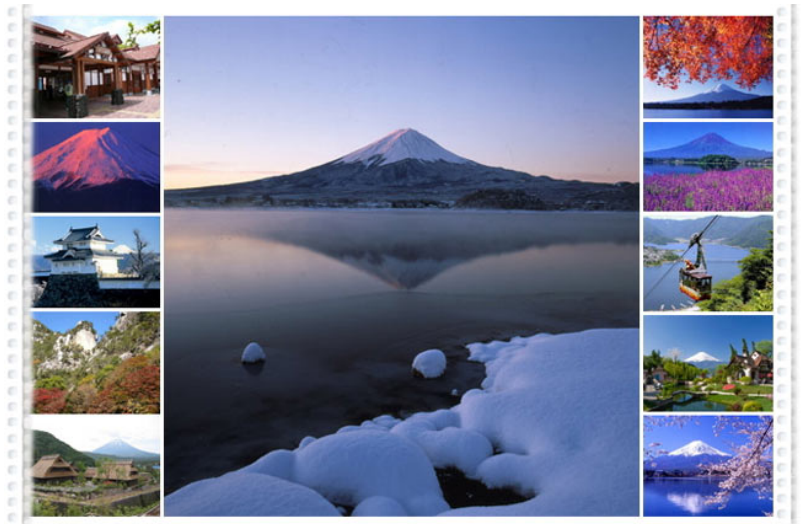
首都圏においてさえ、外国語で観光案内が出来る施設が主要ターミナル駅に極めて少ない。また、地方における観光案内所は、さらに外国語対応力が弱い。また、交通機関、観光施設、飲食店、旅館・ホテル、温泉等における外国語表示が少なく、かつ利用法などの解説も少ない。また、これらに働く人々の語学力は、概して低い。日本の施設の利用方法が理解できない外国人と日本人の小さなトラブルも発生している。このようななかで、外国人の受け入れに消極的な施設も少なくない。

日本全体として、外国人向けの情報サービス、とりわけフェイス・ツウ・フェイスの対応が不足しており、通訳案内士の蓄積した高い語学力や知識を活用していくことが、問題解決の一助となる。

地域の国際化、観光まちづくりにおける通訳案内士の能力活用は、まだ、先駆的な取り組みに過ぎず、助成制度やモデル事業など、国の支援が必要と考えられる。

(事例 1) 富士の国やまなし通訳案内士会

2009年6月19日設立され、本年5月、独自のホームページを開設した。英語、フランス語、中国語の通訳案内士が所属し、富士山や周辺の観光地をガイドする。この地域を訪問する観光客は、通訳案内士を首都圏から同行することが多かったため、ガイド料も高くならざるを得なかったが、この団体に依頼すれば、リーズナブルの価格で半日プライベートツアーが楽しめる。今後は、地元の旅館・ホテル組合や観光業者との連携を強化に努めており、日本文化体験交流塾としても、設立準備段階からこの活動を支援している。



(事例 2) 十和田国際交流協会

十和田市は、新渡戸稲造記念館、十和田湖の自然、奥入瀬溪谷、八甲田山などの豊富な観光資源を生かし、近年、中国人をはじめ、外国人観光客も増加している。このため、国際観光の人材育成が大きな課題となっており、本年7月、外国語観光ガイド養成講座を開催することとなった。対象者は、観光事業者、公的機関の観光事業推進者、通訳ボランティアなどである。日本文化体験交流塾としても、これを支援するため、ベテラン通訳案内士を派遣した。

(事例 3) 筑波での取り組み

学園都市と知られる筑波市及びその周辺では、通訳案内士も多い。日本文化体験交流塾では、産業観光研究会を設立し、ロボットなどの先端技術、環境技術をテーマとした観光ツアーづくりを進めている。また、筑波学院大学と連携して、通訳案内士を講師とした公開講座を実施している。全10回の連続講座のテーマは、「英語で紹介する日本文化と観光資源」であり、「食べ物」「神社仏閣」「四季と行事」「着物」などである。